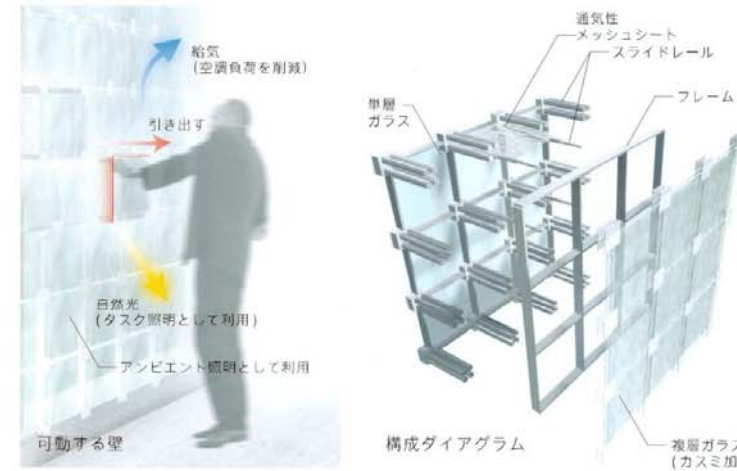


Slide wall

地球環境問題に加えて東日本大震災を受け、日本だけでなく様々な国々が原子力発電から自然エネルギーへと大きくシフトし始めている。しかし、現状の電気供給のあり方や技術では自然エネルギーにより従来の安定供給は難しいとされている。これから社会を形成していく世代にとってエネルギーの問題は大きく、サステナブルな建築的思考として工夫によりエネルギー消費を極力抑えるパッシブな手法が有効なと思われる。ここではガラスの特徴を有効に活用し、エネルギー消費の大きな照明と空調に着目し、利用者がその都度調整できる設備としての機能性を持つ建築を試みた。ガラス空間は透過性という特徴からガラスブロックのような表面加工を行うことで室内全体に安定的に柔らかなアンビエント照明として使用できる。局部的に照度が必要な箇所にはタスク照明を用い、全体の照明器具の負荷を抑えることとした。また、パッシブな空間には空気の流れが重要である

ため、壁面・屋根面を二重ガラスとし、その間に通気層を設ける。夏には外気が通り、新鮮な空気を取り入れることができる一方、冬にはパッシブソーラー効果を期待し、暖気を室内へ供給する。北面・南面のガラスはすべて表面加工なしとし、直射日光を内部に取り入れ、コンクリート床面に蓄熱する。これら照明効果と空調効果を用途・季節・利用者に応じて調節できるように、壁や天井をずらすという簡単な操作により光や空気がこぼれ入るような空間とした。この空間の特徴として安定的に空気循環できることから学術センターやギャラリーなどの機能を必要とする大学など地域と繋がった施設に有効であると思われる。また、ガラスブロックのように規格化しているため、メンテナンスも可能である。自然環境と利用者という建築が繋ぐ両者に対して、持続的に適応していく柔軟な設備の建築の提案である。

設備としての建築



主要用途：学術センター、ギャラリーなど
 最高高さ：3.27 m
 主体構造：鉄骨造
 床面積：54.30 m²
 階数：平屋

